平成３１年３月９日（土）
15：00～17：40
東京大学本郷キャンパス
文学部３号館スラヴ演習室

言語・文学委員会人文学の国際化と日本語分科会（第２４期・第４回）議事録

出欠（出席者○印）
○吉田和彦　○窪薗晴夫　○桑原　聡　田口紀子　○竹本幹夫　○巽　孝之　○沼野充義
日比谷潤子　平田昌司　○松森晶子　米田信子

議事内容
（１）前回議事要旨の確認

（２）「人文学国際化の現状と課題」について
報告 15：00～16：30
窪薗晴夫委員：「日本語研究の国際化―国立国語研究所の取り組み」
桑原　聡委員：「ドイツにおける日本学を中心にー新潟大学での交流について」
沼野充義委員：「日本語書籍の英訳（および他の外国語訳）出版――現在実施されているいくつかの助成・出版プロジェクトについて」
休憩 16：30～16：40
質疑 16：40～17：40
沼野：学術書を翻訳依頼する場合、人選と謝礼が問題となろう。
窪薗：日本語を研究対象とする研究者は比較的数が多い。ただし論文程度ならまだしも、単行本となると無理がある。
沼野：西村先生の提案された研究書の翻訳というのは、厳しいか。
窪薗：本の形では不可能だろう。
沼野：JLPP の場合、翻訳謝金は１頁当たり４０００円程度か。厚い本だと翻訳謝金だけで４００万円くらい掛かってしまう。
巽：桑原委員の提出された英語版の新潟大学パンフレットによれば、人文学部では、サブカルチャーもハイカルチャーも同様に扱うように読めるが、それでよいか。
桑原：人文学部には６０名の専任教員がおり、古典芸能・考古学・歴史学・心理学・映像論・哲学など人材が多様で、現在はそれなりに質を保っている。
巽：マンガ・アニメを取り上げてそれを英語で講義するとなると、そこを入り口にして、文学研究に進む例もあるはず。留学生に呼び掛ける際は、”modern media culture(manga,anime)”で良いのか。

桑原：マンガ・アニメでそのまま通じているようだ。さらに多くの留学生を集めることを目指している。

巽：マンガを表に立てるのは画期的といえよう。翻訳では、サントリー財団の出す本が面白い。同一人物が複数の翻訳をしている例がある。ラウトリッジ社のような出版社の依頼で、日本の学者が翻訳者を連れて大学を回り、翻訳すべき本を出せるような著者を発掘している。日本語の研究書でも、徐々に状況は変わってきた。

沼野：欧米の出版社との関連を強めることは非常に重要だろう。

巽：現代では翻訳でも、恣意的な改編を施さないものが増えてきた。

吉田：日本の人文学の研究者の知見が、世界に発信されることが大事だ。それはたんに英語化という事だけではないはず。欧米の研究者の業績を日本語で批判するというのはおかしい。外国語で発表出来ないのは、日本固有の分野だけだが、それにはやはり翻訳が必須だろう。学術振興会のプロジェクトに日本学のために来日する留学生への支援制度がある。そうしたプロジェクトに参加する留学生のマンパワーに期待出来ないか。例えばそういう学生たちの留学中の課題として、日本語研究文献の翻訳を課すというようなことはむつかしいか。なお国語研究所では、翻訳謝金は機構長の裁量予算で出すことが多いそうだが、年俸制に移行すると、研究文献の外国語翻訳に対する支出が難しくなるように思われる。そうしたことには何らかの公的な基金が必要なのではないか。これも含めて、この分科会での提言を構想するためには、そろそろテーマを絞るべきだろう。

窪薗：学術振興会で制度化すれば、先の翻訳事業は可能性があろう。

吉田：留学生が自分の指導教授の研究内容を発信するのでよいだろう。それをポータル化・一元化するセンターのようなものが必要なのではないか。

窪薗：留学生自身の研究成果の発信で構わないのではないか。

沼野：ロシアの場合、英語で発信されても対応不可能だ。ロシアではロシア語のみしか通じない。この事情は日本学の場合ともある程度似ている。

桑原：言語の多様性を保証するグローバル化ということをどのように構想したらよいのか。自然科学では英語の論文執筆が世界共通で常態化している。それに人文科学が合わせるということで、果たしてよいのか。言語の多様性ということと共通言語ということの両立は、ありうるはずだ。両方を扱えないとダメだろう。

沼野：英語による国際化の動向は押し止めがたい。一方で日本語そのものの大切さということも強調する必要がある。合わせてその他の非英語の外国語も大事であることも強調したい。このあたりを提言の核に据えるべきか。

窪薗：共通語と固有言語の関係は、標準語と方言の両立の問題と類似点がある。

松森：ガラパゴス化＝オリジナリティという図式があるので、固有言語の重要性の発信ということには相応の価値がある。言語の異質性というのは翻訳不可能であり、固有言語ごとにロジックからして異質であるという事実を、大学院レベルの研究者には教

えねばならない。そのためには学生にはむしろ英語による発信を経験させるべきだろう。

窪薗：語学能力を磨くだけではなく、知見を広めることが必要だ。

竹本：英語で自分の研究が説明出来るという能力が、これからの人文系の研究者には求められるだろう。

沼野：アカデミックライティングの授業も必要となる。例えば北海道大学スラブ研究センターの合宿による論文指導などが参考になろう。こういう教育プログラムの充実を強調することも、提言のレベルとしては悪くない。

窪薗：論文指導の授業で、サブスクリプトやプレゼンまでも訓練させることが大事だろう。

松森：英語論文作成法の授業が英文学科にはあるが、これを例えば日本語・日本文学の学生にやらせたい。

竹本：日本人が英語で日本語・日本文学に関する本格的な論文を書くことには限界があるのではないか。

桑原：共通語を用いることにより、オリジナルな内容から何が失われるのかに着目すべきか。学問の世界で共通語としての英語を用いるのは、ある意味で当然のことではある。

沼野：提言ということを念頭に置くと、次回の分科会は、予定を前倒しにして７月に開催するのが適当か。人文学の国際化における基本的な考え方として、言葉を大事にするというのは、どういうことかについて、論議を深めたい。外国人の日本学者の意見を聞くのはどうか。例えばＵＣＬＡのマイケル・エメリック氏はしばしば来日するようなので、彼に声を掛けて見る。

巽：もっと若手の研究者でも日本語の堪能な優秀な留学生もいるので、同席してもらってはどうか。

沼野：次回は「日本語でなければ出来ないこととは何か」に留意しつつ、各自提言案をＡ４版一枚程度に箇条書きでまとめて持ち寄ることとしてはどうか。

竹本：それでは一人１０分見当で全員がそれぞれの案を発表し合い、その場に外国人研究者にもディスカッサントとして同席してもらって、最後に意見を求めると言うのでいかがだろう。時間は 14：00 から 18：00 としたい。

沼野：松浦委員長にも同席を願った方がよいように思う。日程については、自分が皆さんにアンケートをお送りするのでよろしく回答されたい。エメリック氏には竹本委員から声をかけて欲しい。あらかじめ趣旨を伝えておいて、夕方一時間程度参加してもらい、意見を述べてもらうことでよいか。

（3）その他

① 今後の方針について

提言のための具体的な準備に入ること（討議記録後半を参照）。

② 次年度の分科会開催日程について

7 月中の土日を目途にアンケートを取る。次回には各自Ａ 4 で一枚程度の提言案を箇条書きの形でまとめ、当日 10 分程度で発表すること。発表は休憩を含め計二時間、討議一時間、外国人研究者の意見聴取と討議一時間の予定。

③ その他

とくになし。